

関西大学博物館所蔵の山形土偶について

上 杉 彰 紀

関西大学博物館では、茨城県稲敷郡江戸崎町に所在する椎塚貝塚出土の土偶を所蔵している。明治～大正年間に東京人類学会などによって数次にわたる発掘が行なわれたが、十分な記録がとられることもなく、出土遺物のみが遺跡とは遊離した形で今日の学界に知られている。

椎塚貝塚から出土した土偶は、現在、本学博物館のほか、大阪市立博物館（旧下郷コレクション）、東京大学総合研究博物館、慶応義塾大学考古学民族学研究室、國學院大學考古学資料館などに分散所蔵されているが、本学博物館が所蔵する椎塚貝塚出土の7点の山形土偶は、うち4点に「大正七年十一月六日」もしくは同年「十一月七日」という注記がなされており、この両日に一括して採集された資料と考えられる。その出土層位や相伴土器については不明であるが、この2日間に一括採集されたとするならば、出土層位も比較的近接する可能性が高い。

本学博物館所蔵の山形土偶のうち典型的なも

のを3点取り上げ、その特徴についてまとめることにしよう。頭部形態については、1が横楕円形を呈し、2が略三角形の山形を呈する。3では頭頂部が上方に突出する。顔の表現については、基本的に眉と顎の部分に粘土紐を貼りつけ、その間の部分に目・鼻・口を貼りつけて成形する。目は1・3では楕円形の粘土塊に横方向の短沈線を施して表現するが、2では短沈線がなく、粘土塊の周縁に沿って弱い刻目を施している。鼻は目と同じ高さで直線的に並ぶようになっている。口は粘土塊の中央をくぼませるか沈線を施す。1・3では周縁に刺突を施している。耳の表現については、頭部から未分化であり、形態的にあまり意識されていないようであるが、1では意図的なものかどうか不明なもの、刺突状のくぼみが頭部の右側面にみられる。ともに後頭部には瘤を表現する。1では首の部分に横方向の沈線を施し、その下に刻目を施す。文様については、2に沈線と縄文を組み



写真1

合わせた磨消縄文が施されている。

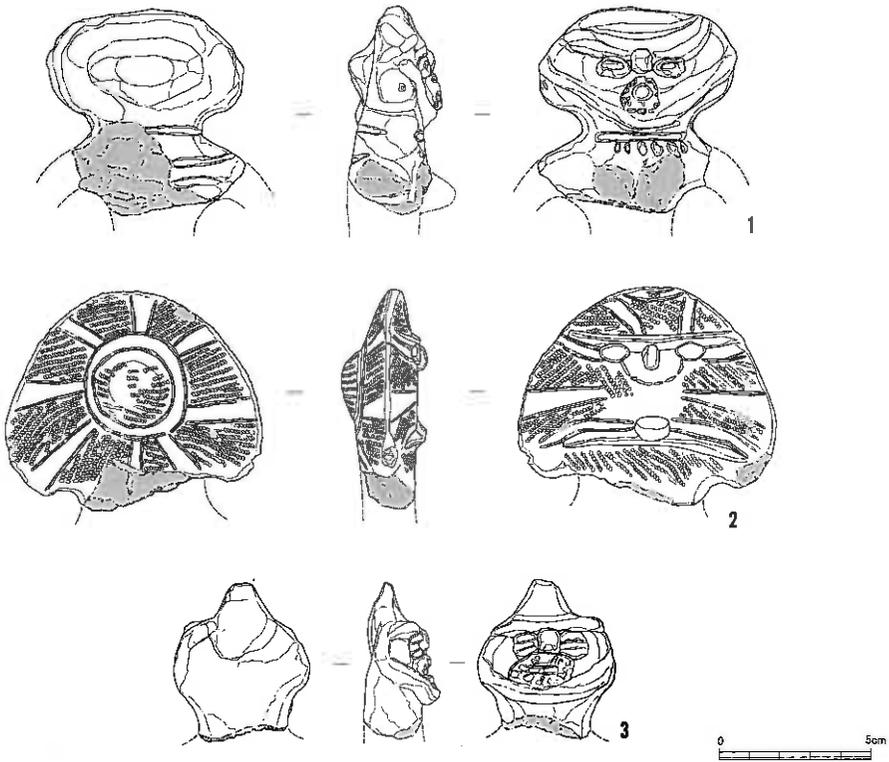
山形土偶は後期中葉から後葉の関東地方に多くの類例が知られるが、その影響を受けた形態の土偶が西日本にも分布することも周知の通りである。後期中葉頃の磨消縄文の汎日本的拡散とも関わるもので、当該時期の広域地域間交流の所産として考えられる。

しかしながら、その形態には地域によって顕著な差異が認められる。本学所蔵資料は、主に霞ヶ浦周辺から房総半島西部に集中する型式で、北関東を中心とする山形土偶とは形態的差異が著しい。この形態の地域性については、時間・空間軸における変遷を明確にする必要があるが、いずれにせよ、地域性の存在はそれぞれの形態に関する情報が共有され維持される地域空間が形成されていたことを示すものとして注目される。形態が製作者・使用者の意図なしに決定されるとは考えられず、形態に関する情報の伝達・共有が形態の地域性の形成の背景にあるとするならば、土偶の形態変化が人々のいかなる行為や社会の仕組のもとに生じるのか、山

形土偶を構成する形態属性の詳細な把握と比較をもとに検討していく必要がある。

また、もう1点、山形土偶に関して注目されるのは、霞ヶ浦周辺で土偶を大量に出土する遺跡の存在である。その代表として、ここで取り上げた椎塚貝塚、福田貝塚、立木貝塚、金洗沢遺跡などがある。破片での出土が多いため実数については不明であるが、50個体前後は出土しており、遺跡の一部の調査であることも勘案すれば、土偶の集中的な使用行為が推定できる。これがいかなる行為に起因するものであるのか断定し得ないが、当該時期における土偶の広範な拡散現象とも合わせて、その社会的背景を考える1つの手掛りとなるであろう。例えば、土偶の使用頻度が相対的にせよ増大し、人々がそれに接する機会が増加する過程に山形土偶拡散の要因を推定することも1つの解釈の可能性であろう。解釈はともかく、山形土偶が保有する情報という観点から、形態の把握とその分布を検討することは、この時期の社会の仕組や地域間交流を解明する糸口になると考えられる。

(関西大学大学院生)



第1回 土偶実測図